

[自由研究]

## SBL (Society of Biblical Literature) 学会参加報告

田 中 光

### はじめに<sup>1)</sup>

2024年11月23-26日にかけて、アメリカのサンディエゴにて、SBL (Society of Biblical Literature) の年次学会が開催され、報告者も25-26日のみ部分参加した。SBLとは、最も古くまた最も規模の大きい聖書学の学会で、北米を中心に、7000人以上の研究者たちがこの学会に名を連ね、活発な研究活動が行われている。この小論は、そのSBLの年次学会に参加した報告者によるレポートである。

今回、SBLの学会に参加するにあたっては、幾つかのきっかけがあった。一番直接的なきっかけは、本学の同僚の先生方が、最近積極的に海外の学会に参加しておられたことである。昨年は河野克也先生がアメリカのサンアントニオで開かれたSBLの年次学会に、そして今年の本城仰太先生がイギリスのオックスフォードで開かれた国際教父学会に、それぞれ出席された。こうした先生方のお話を伺って、私自身が感化されたことが一番大きなきっかけであった。

しかしそれだけでなく、ごく最近、留学していた際に親しくしていたカナダ人の友人とAcademiaという学術交流サイトを通して再び連絡を取り合うようになり、彼のアドバイスによって、この度、とある海外の聖書学の雑誌に論文を投稿することにチャレンジできたことも大きなきっかけだった。このやりとりの過程で、この友人が大変精力的に執筆活動や論文投稿、学会参加を行っ

ている様子を聞いたことが、私に大きな感化を与えた。留学から帰って来から、国際的な学会に参加したり、英語で論文を書いたりすることが全くなくなってしまっていた私は、こうした様々な機会を通して、もっと積極的に海外での学术交流や、海外の雑誌に論文投稿するモチベーションを与えられたのである。

今回、学会への参加を決めたのが6月頃であった。河野先生から学会の様子や参加の方法などを伺い、手続きを行った。学会参加のためには、SBLのメンバーシップを取得する必要がある。これはSBLのホームページを通して手続きが可能である。私は、元々メンバーシップは取得していたので、後は学会参加の手続きをするだけであった。申し込み後は、基本的にはメールで学会に関する様々な情報が適宜送られてくるので、それに従って準備を行った。私は今回、口頭発表はしなかったが、口頭発表をする場合には、更に早い段階から、事務局宛に論文のアブストラクトを送るなどの手続きが必要となる。

年次学会の規模は途方もなく巨大で、数え方にもよるが、数日間の学会期間中に、900以上のセッションやワークショップが行われるとも言われる。学会期間中は、セッションと併せて、出版物の販売も大きな目玉となっている。コンベンションセンターのエキシビジョンホールには、数多くの出版社がブースを設けていた。殆どの書物は30-40%引きで販売され、出版関係の相談なども行われていたようである。

このように巨大な規模の学会なので、どのセッションに参加して、学会中どのように過ごすかという計画を立てるのも一苦勞である。参加者は、学会事務局から送られてくる学会の日程表の冊子（ほぼ電話帳のようである！）を見るか、あるいはSBLのホームページからダウンロードできる学会用のアプリを端末にダウンロードすることによって、自分の参加したいセッションを決めて、スケジュールを立てることができる。私は今回、数あるセッションの中から、25日に行われた二つの詩編に関するセッションと、26日に行われた古代教父の聖書解釈に関するセッションに参加した。どれも興味深いセッションだったが、紙面の都合上、今回は二つの詩編のセッションの報告のみを掲載したい。

## 学会でのセッションの様子

セッションの具体的な内容を報告する前に、セッションの形式的な情報を記しておこう。今回の学会の期間中、各セッションは、サンディエゴのコンベンションセンターという施設の会議室を中心に、周辺のホテルの会議室なども利用して行われた。各セッションの規模は、恐らく大きくても40-50名程度で、少ない場合は15-20名程度である。5名程度の発表者が立てられ、司会者の導きの下、一人25分の持ち時間で発表し、5分は質疑応答に充てられる。そして全体で2時間30分という枠組みである。

発表の形式は発表者によって様々であるが、基本的に完全原稿が配られることはないので、英語が母国語でない参加者は、英語のリスニング力が試されることになる。簡単なハンドアウトを配る発表者もいるし、パワーポイントで発表する発表者もいるが、場合によっては、ただ口頭で発表する発表者もいる(実際そういう発表者が数名いた)。いずれの場合においても、発表する内容の全てが活字になっているわけではないので、集中して聞く必要がある。

### ・詩編に関するセッション①

25日午前中に、詩編に関する一つ目のセッションに参加した。セッション全体のテーマは定められておらず、発表者がそれぞれに関心のあるテーマに基づいて発表した。ここでは、特に興味深かった発表として、アメリカニューヨーク州のSt. Vladimir Seminaryで教鞭を執る、Michael C. Legaspiの発表の要約とその意義について以下に記してみよう。

Legaspiの発表のタイトルは“Tradition Not History: A Reconsideration of Psalm 78”と題されたもので、詩編78編の伝統的な形態批評的判断に再考を促す内容であった。ところで、少し話は逸れるが、実は私は、このLegaspiとカナダ留学中お会いしたことがあった。私が留学していたトロント大学ウィクリフ・カレッジでは“The Scripture and Theology Colloquium”という研究会を組

織していて、私も10年以上前、学生として、この学会に定期的に参加をしていたが、そこに2012年のゲスト・スピーカーとして来られたのがLegaspiであった。彼はその研究会の中で、ノートルダム大学に提出して出版されたばかりの博士論文、“The Death of Scripture and the Rise of Biblical Studies”<sup>2)</sup>の要約を発表してくれたが、その内容は、歴史批評的研究の歴史を跡付ける研究であった。Legaspiによれば、いわゆる伝統的な機能や権威を持った聖書は宗教改革期以降に死に絶えてしまい、代わりに、啓蒙主義の中で登場してきた歴史批評的研究が、聖書に新しい意味付けを与える、そしてその研究のための様々な新しい学問的形式を備えた、全く違うタイプの聖書解釈の営みとして登場したのである。Legaspiは当時から今に至るまで旧約聖書学者を自認する研究者だが、いわゆる旧約プロパーの研究にとらわれず、こうした仕方で、聖書解釈の歴史やその神学的本質を深く探究しようとするタイプの研究者なのであった。勿論、その時は直接お話をする機会は与えられなかったが、彼の発表は私の心に強く残り、今回、10年以上の時を経て、SBLで彼の詩編78編の発表を通して、不思議な仕方でまた彼と巡り合うこととなったのである。

話が本当に逸れてしまったが、以下彼の発表の要旨をごく簡単に要約する。詩編78編は、形態批評的には、典型的な「歴史の詩編」(historical psalms)に該当するとされてきた。しかしLegaspiは、この形態批評的判断に挑戦しようとする。確かに、この詩編においては出エジプトに関係する一連の出来事の振り返りが行われているが、しかしそうした出来事は決して時系列に並べられているわけではない。加えて、この歴史的振り返りの中で、モーセの名前が一度も出てこない点は大変奇妙である。こうしたことを手掛かりにし、また隣接する詩編(詩77; 79)の形式も手掛かりにしながら、Legaspiは、この詩編は単なる「歴史記録」(historiography)を提供しようとしているのではなく、むしろより共同体的・神学的内容を包含していることを主張しようとする。Legaspiによれば、この詩編で問題になっている主題は、歌い手個人の「永続的な困惑」(perplexity)である(2節「ヒッドート・ミンニー・ケテム」cf. ESV: “dark sayings from of old”)。Legaspiによれば、この詩人の困惑は、共

共同体において永続的に伝承されるべき伝統 (tradition) が、共同体の不確かな心 (つまり、不信仰あるいは罪 cf. 8節) によって顧みられていない現状に起因している。このように、この詩編が問題としているのは、歴史の解釈や政治的主張ではなく、共同体における伝統の継承という問題である。そして Legaspi は、共同体における伝統の継承が解決される鍵としてこの詩編が提示しているのが、ダビデの選びと支配であるとする (67-72節)。ダビデは、今までの議論を踏まえれば、単なる政治的理想ではなく、共同体が伝統の継承という営みに立ち続けていくために不可欠な要を提供している存在なのである。

以上、「歴史の詩編」を「伝統の詩編」として読み直すことを提唱する Legaspi の研究を紹介した。歴史批評的研究の限界を鋭く指摘し、教会の伝統的解釈ということに強い関心を示してきた Legaspi らしい発表だったと言える。彼は現在、正教会の信徒でもあるので、そうした関心も、彼の詩編解釈に反映されていることは間違いない (「伝統」への関心)。Legaspi の発表が今後活字化されて、どこかのジャーナルから出版されるかどうかは分からないが、以上の Legaspi の発表の意義を一言で述べてみよう。私見では、Legaspi の見解は、詩編を形態批評的に解釈する際には、ジャンルでひとくくりにする前に、一度その内容をより厳密に検討し、とりわけ神学的観点から読み直して必要性を示唆していると言える。特に「歴史の詩編」は、詩編という書物全体の形成の歴史の中でも重要な位置づけを担っており、その意味でも、そこにおいて問題になっている「歴史」がいかなる意味での歴史なのかを問い直す意義は大きいだろう (「伝統」 or 「客観的歴史記録」)。また最後に、Legaspi の議論は、旧約が考える「歴史」は決して、我々が考えるような歴史記録や政治的なものではなく、もっと異なったコンセプトによって規定されていることを示唆しており、このことは、詩編という書物の枠を超えた議論にも繋がっていく可能性がある。セッション終了後、僭越ながら Legaspi に挨拶をさせて頂き、しばし様々なトピックに花を咲かせることができた。この交流をきっかけに、Academia を通しても Legaspi と繋がりを持つことができた。この交流を得ることができただけでも、私にとっては大変有意義な時間であった。

## ・詩編に関するセッション②

私が参加したもう一つのセッションは、同じ25日の午後に開かれた詩編に関する二つ目のセッションであった。こちらのセッションは、一つ目の場合と違い、セッション全体にあるテーマが設定されており、今回の場合それは「エロヒーム詩編」（あるいは「エロヒスト詩編」Elohistic Psalter）であった。「エロヒーム詩編」とは、詩編42-83編のまとまりのことで、いわゆる詩編の五巻から成る構造の内、第二巻から第三巻（詩42-89編）の途中に当たる。この詩編のまとまりにおいては、他の箇所と異なり、神に対する呼び名として、神の固有の生である聖四文字（YHWH）よりも「神」（エロヒーム）という一般名詞が突出して多く用いられているので、「エロヒーム詩編」という名前がついている。

1835年のH. Ewaldの研究以来、エロヒーム詩編は、元来神名が神の聖四文字であったところが、編集作業によって「神」（エロヒーム）という神名に変更され、現在の形を取るに至ったとの仮説が提示された。しかしその後、特に最近のE. Zengerなどの議論などをはじめとして、このまとまりにおいては編集作業によって「神」（エロヒーム）という神名が現れてきたのではなく、むしろ元来こうした神名が用いられていたとの主張がなされるようになってきた。

このセッションでは、こうした研究史を踏まえつつ、エロヒーム詩編の本質が様々な観点から論じられた。例外もあったが、<sup>3)</sup>総じて、セッション全体の方向性は、Ewaldが提唱した古い編集的見解に戻ろうとするものを感じられた。例えば、Tel Aviv UniversityのJonathan Ben-Dov（“Divine Names in the Elohistic Psalter: Replacement or Composition?”）は、書記の活動（scribal activity）によって「神」（エロヒーム）という神名への変更が行われたとする。その意図は、神の普遍性をより強く示すためであったという。同じような見解は、Philipps-Universität MarburgのAlexandra Grund-Wittenberg（“Names of Power: Ps 14 and 53 in Context”）や、Christian-Albrechts-Universität zu KielのRonja Koch（“Names Have Power: Psalm 46 and the Elohistic Psalter”）らに

よっても示されていたように思う。前者は、詩編14編が二次的に詩編53編に受け入れられ、「エロヒーム編集」を受けるに至っていると論じており、後者は、詩編46編におけるエロヒーム編集を前提として、そこにおける更に多様な神名が、その後に行われた発展的な編集の痕跡であったと論じている。

こうした「エロヒーム編集」への回帰をどのように評価すべきであろうか。私見では、旧約聖書テキストの歴史的発展を跡付ける仮説は、モーセ五書の研究を代表として、これまで様々なものが数えきれないほど提案されてきているが、コンセンサスに到達することが往々にして困難であることを考えれば、こうした決め手のない仮説の出し合いを続けていくことにはあまり大きな実りが無いようにも思える。しかし一方で、この「エロヒーム編集」の議論を通して見えてくる重要な神学的トピックとして、神名に込められた神学的意図の問題がある。ある詩編がまとまって、聖四文字による神の名ではなく、「神」(エロヒーム)という神名を用いるとき、そこにはどんな神学的意図や効果が認められるのか。この点は確かに探究するに値する主題である。特に興味深いのはP(祭司文書)との関わりである。何人かの発表者たちも言及していたが、「神」(エロヒーム)という一般的な神名に、極めて神学的な意味を付与したのがPであった(例えば創世記1章)。そうすると、エロヒーム詩編はPの神学と関係しているのかといった問いが必然的に出てくるであろう。しかし、これまでの議論では、どちらかという、祭儀的な専門知識を持たないレビ人が詩編の編集に深く関与しているという仮説が出されてきた(例えばオックスフォード大学のS. Gillingham)。詩編にはPの神学と響き合う内容があるのか、そしてそれはレビ人の神学とどう関係するのか。「エロヒーム編集」の歴史的プロセスに関する詳細を明らかにすることは困難でも、「神」(エロヒーム)という神名にどのような神学的意図が込められていて、それは詩編の最終形態のメッセージとどのように関わるのかという観点から研究を進めるならば、結果的に通時的な観点からも大きな実りが得られるに違いない。

## おわりに

以上、大変不十分ながら、今回のSBL年次学会で私が出席したセッションの報告である。総じて、私としては大変勉強になり、またよい出会いの機会となった。最後に、今回の学会出張で与えられた思わぬ二つの出会いについて記して、報告の締めくくりとしたい。一つ目の出会いは、私が留学中にThM論文審査の副査としてお世話になった、トロント大学ウィクリフ・カレッジのMarion Taylor先生と偶然再会したことである。全く思いがけない再会で、先生と少しだけ立ち話をし、近況を報告し合う機会を与えられた。もう一つの出会いは、帰国の際、サンディエゴの空港で、本学でも教えてくださっている青山学院大学教授の左近豊先生と偶然お会いしたことである。先生もSBL学会にご出席だったとのことだったが、学会中は全くお見かけしなかったため、この空港での出会いは私にとっては全くのサプライズだった。先生もSBL年次学会出席は9年ぶりとのこと。日本にいと、海外の学会出席のハードルが本当に高いことを思い知らされた。学会ではこうした思わぬ出会いを与えられたことで、神の不思議な導きに接することができ、感謝とともに日本に帰国することができたのであった。

(たなか・ひかる)

## 注

- 1) ここに記したSBLに関する基本情報は、SBLのホームページ (<https://www.sbl-site.org/>) を参照している。
- 2) Michael C. Legaspi, *The Death of Scripture and the Rise of Biblical Studies* (Oxford: Oxford University Press, 2010).
- 3) 例えば、最初の発表者であったオーストラリアのMonash UniversityのIdan Dershowitz (“An Methodological Exploration of the Elohistc Psalter”) は、これまでの研究史や様々なデータを整理することに徹しつつも、自らの結論としては、どちらかと

## SBL (Society of Biblical Literature) 学会参加報告

言うと、エロヒーム詩編は元来「神」(エロヒーム)という神名を用いていたという意見に傾いていた。